

ながわ

那珂川町郷土史研究会

探訪 74

(裂田水路)について

山田・安徳の歴史を語るときは、どうしても神功皇后にまつわる「二の井手」や裂田溝の伝承話から始めなければなりません。

裂田溝は、今から約1,600年前の4世紀末から5世紀初頭に造られたといわれ、「日本書紀」巻九・神功紀には次のよ

裂田溝1

さくたのうなで

うな内容で記載されています。神功皇后が神田開発のために溝を掘ったところ、大磐に行き当たってしまいました。

武内宿禰に命じて神器を祀り祈らせました。すると、雷鳴が轟き、大磐に落雷して大磐を蹴破ったので水を通すことができたそうです。また、貝原益軒が宝永6年(1709年)に著した「筑前國統風土記」に、このことが詳しく記されていますので紹介します。

「安徳村の巽(方位・東南)の方、龍神の城(岩門城)下、御所原(安徳台)の東の崖下にあり。日本紀(日本書紀)神功皇后紀に曰く、皇后、神教の験あることをしらしめし。更に神器を祈りまつりて、みずから西を討ち給はんとおぼしめし、ここに神田を定めて佃せらるるときに、雛河の水を引いて、神田につけんとおぼして溝をほらせらる。迹驚岡(安徳台)に及んで大

磐ふさがりて通すことを得ず。皇后、武内宿禰をめてして剣・鏡を捧げて神器にいのりて溝を通すことを求む。即時に雷電霹靂してその磐を蹴裂て水を通せしむ。故に時の人その溝を号して裂田溝という。日本紀に見えたり」と記されています。

裂田溝は今も行き届いた管理のもと、地元山田区だけではなく、安徳・東隈・仲・五郎丸・松木・今光の7区を潤してきました。

田畑約130町歩が、この水路の恩恵に浴していたのです。

溝は、裂田神社の裏から安徳台の麓に沿って安徳区の針口までの約200mが往時の姿を一番とどめています。この地峡を抜け、針口に出た溝は、安徳大塚古墳の山麓を東北に流れて、仲の炭焼で2本に分かれ、1本は西に流れ現人神社の南側を経て那珂川に。他の1本は東北に流れて松木・今光を経て



裂田神社裏の大磐



裂田神社



昭和62年 改築前の一の井手

サクタノウナデ
裂田溝を歩く
那珂川町郷土史研究会

